

日本ワイルド協会創立20周年記念
第20回日本ワイルド学会から

〔記念講演〕

ワイルドの喜劇

—『真面目が肝心』を中心に—

玉井 障

(大阪大学助教授)

ワイルドの喜劇についての最近の研究動向を見ていると、とりわけ最終作『真面目が肝心』の読みをめぐるものに新しい動きが出てきているように思われる。新しい読みの問題を考えるに当たって興味深いヒントを与えてくれるものとして、二つの文献を紹介することから話を始めたい。まず、Terry Eagleton がワイルドという人物をドラマ化した自作 *Saint Oscar* に付けた「前書き」(Lawrence Hill: Field Day, 1989)。もう一つは、1993年 Aldwych で上演された、Nicholas Hytner 演出の『真面目が肝心』についての John Stokes の劇評である (*TLS*, 19 March 1993)。

イーグルトンが注目するのは、ワイルドがアイルランド人としてのアイデンティティを強く意識していたにもかかわらず、極めて典型的な上流階級のイギリス人と見えてしまうという、「奇妙なパラドックス」である。確かに、ワイルド文学における Englishness,あるいは Irishness,あるいはその二つの共存と対立といった問題は、従来まったく触れられなくはなかったが、今後いっそう興味深くなるテーマであろう。イーグルトンの関心は、さらに進んで、この問題を今日の文化理論の観点から考えようとする。彼によれば、ワイルド文学は「驚くべきほどに現代の文化理論の洞察を予想している」という。見方を変えて、「文化理論は、目新しさで活況を呈しているが、いくつかの点で世紀末の時点からはあまり進歩していない、と言ったほうがより正確だろう」とまで述べている。

ワイルド文学が予示していた先駆的な点とは何か。イーグルトンは列挙する——「自己言及する言語、都合次第のフィクションとしての真実、矛盾を孕み〈ディコンストラクトされる〉人間の主体、〈創造的な〉エクリチュールとしての批評、偽善的なイデオロギーに対抗する身体とその快楽」。このような今日のポスト・モダニズムに通じる面を指摘して、イーグルトンは、ワイルドを「アイルランドのロラン・バルト」と呼んでいる。

ワイルドを、こうした文化理論、新歴史主義、ポスト・コロニアル批評といった見方から評価しようとする動きがあるとすれば、他方、ジョン・ストークスの劇評は、ジェンダ

ー、セクシュアリティ、ホモ・エロティックスを重視しようとする新しい動向が現れていることを伝えるものであろう。すなわち、この劇には同性愛のサブテキストがあると見る解釈にもとづいて、この劇の演出が行なわれたことに注目している。オープニング・セットをはじめ、ジャックとアルジャンが「純粹に兄弟同士のあいだではありえないようなかたちでソファの周囲でふざけあう」様子に、同性愛者の存在を表象する演出があるという。最近の研究により、ジャックの住むロンドンの「オールバニー館」は当時同性愛者のフラットであったことが明らかになったし、また、名前「アーネスト」にも同性愛者を暗示するものがあることを論じた研究も注目されている (Timothy d'Arch Smith, *Love in Earnest*, 1970)。

このような「性の揺らぎ」を重視する研究には、最近目を見張るものが多い。Jonathan Dollimore, *Sexual Dissidence* (1991), Joseph Bristow, *The Importance of Being Earnest and Related Writings* (1992), Ed Cohen, *Talk on the Wilde Side* (1993), Eve Kosofsky Sedgwick, *Tendencies* (1994), Christopher Craft, *Another Kind of Love* (1994), Alan Sinfield, *The Wilde Century* (1994) などがある。

本講演では、こうした最近の研究動向を踏まえ、『真面目が肝心』を劇として読むとはどういうことなのか、そのときテキストにはどのような特質が浮上してくるのかを考えてみた。テキスト中に頻出するテキスト——たとえば、ジャックのシガレット・ケース、「アーネスト」の住所の書かれた名刺、ブラックネル卿夫人の花婿候補者名簿、グエンドレンとセシリーの日記、ミス・プリズムの3巻本小説、冠婚葬祭のすべてに当てはまるチャジュブル牧師の説教原稿、セシリーの「貴紳録」「出生届、百日咳、はしかの証明書」、ミス・プリズムの傷のついた手さげ靴、など——に注目し、劇的世界におけるその意味を考え、特にジャックの本名、身元が判明する『陸軍将校名簿』に窺われるエクリチュールの両義性を強調した。そして、新しい研究方法論に関しては、この『真面目が肝心』を「言葉の劇」と見る解釈に資するものであれば、意欲的に受け入れていってよいことを示唆した。